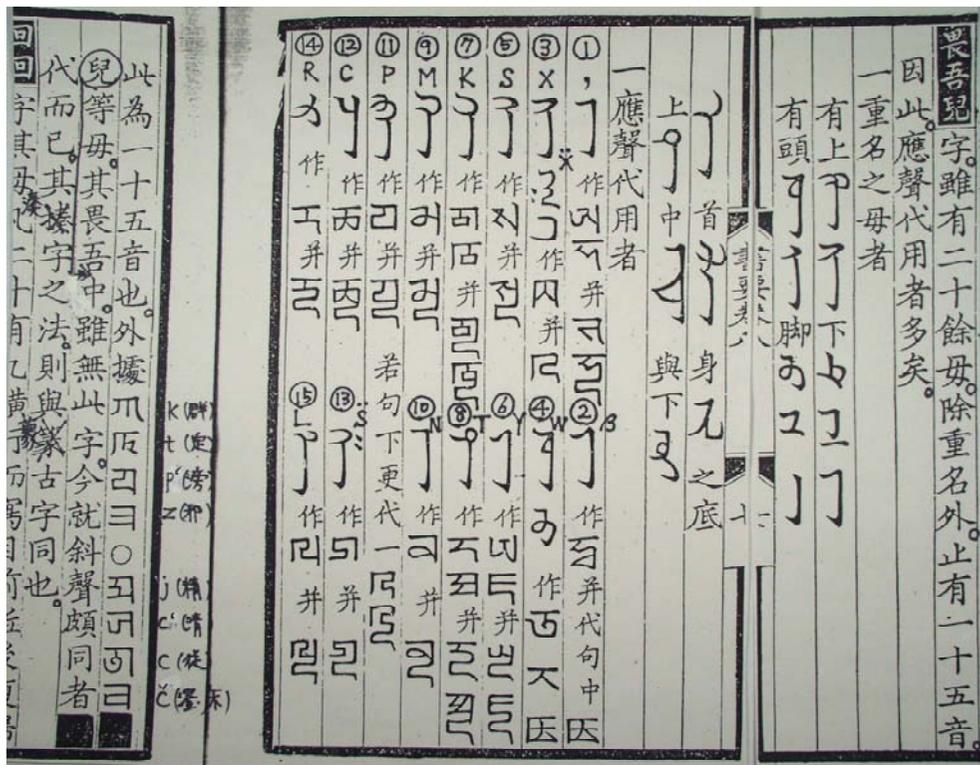


書史会要ウイグル字母表中のパスパ文字

吉池孝一

一

『書史会要』(洪武九年自序、1376年)は元末明初の陶宗儀の著書。卷之八外域篇には、天竺、畏吾兒、回回、日本の文字について記載がある。各部の文字を説明する際、ふつうには字母の下に漢字の音注を付すのであるが畏吾兒の部だけは異なった体裁となっている。まずウイグル文字を示し、それに対応するパスパ文字を下に付す。



※本表には誤字衍文などがことのほか多い。「捺字之法」を「湊字之法」に、「篆古字」を「蒙古字」に訂正する点は森安孝夫(1997)に指摘がある。

このウイグル字母表の性格に言及したものに森安孝夫(1995)(1997)¹⁾がある。森安(1997;p.1234)によると、字母数の減少及びその融合の状況よりみて「ここには最早本来のウイグル=アルファベットの姿は見られず、むしろモンゴル文字と呼ぶ方がふさわしかろう」としている。本表のウイグル文字がモンゴル語を表記するための文字であると断定しているわけではないけれども興味深い指摘である。この字母表の性格を考えるうえで、ウイグル文字の下に記されているパスパ文字が参考となるけれども、管見による限りこれまでパスパ文字について検討されたということを知らない。パスパ文字は「声に応じて代用するもの」という見出しの「声」に相当するわけであるから、この「声」

すなわちパスパ文字が何語を示しているかを知りたいところである。可能性として、①ウイグル語、②モンゴル語、③ウイグル語とモンゴル語という三つを挙げることができよう。

結論は、ウイグル字母表中のパスパ文字はモンゴル語音(漢語語彙の音を含む)を示す、というものである²⁾。

二

「応声代用者」はウイグル文字に対応する或る言語の音をパスパ文字で表示したもの。すなわち或る言語を表記するウイグル文字の「一字多読」の状況をまとめたものと言うことができる。以下、「応声代用者」中のウイグル文字とパスパ文字の対応の状況を整理しローマ字に翻字して提示する。なおパスパ文字のローマ字への翻字法は Poppe (1957) による³⁾。

	男性母音	女性母音
① aleph (ʾ)	作 ʾ(a) h(a)	並 è he
② beth (β)	作 f(a)	並代句中 -v
③ heth (X) heth+: (X)	作 q(a)	並・(a)
④ waw (W) (-W)	作 u o -v	
⑤ sin (S)	作 s(a)	並 se
⑥ yod (Y)	作 y(a) ǰ(a)	並 ye ǰe
⑦ kaph (K)	作 g(a) kʼ(a)	並 ge kʼe
⑧ taw (T)	作 d(a) tʼ(a)	並 de tʼe
⑨ mem (M)	作 m(a)	並 me
⑩ nun (N)	作 n(a)	並 ne
⑪ pe (P)	作 b(a)	並 be
⑫ sadhe (C)	作 čʼ(a)	並 čʼe
⑬ sin+: (S)	作 š(a)	並 še
⑭ resh (R)	作 r(a)	並 re
⑮ hooked resh (L)	作 l(a)	並 le

【若句下更代一・(a)・e】

前掲ウイグル字母表(以下、字母表とする)中のパスパ文字が何語の音を示しているか。それを知るためには、ウイグル字ウイグル語とパスパ字ウイグル語、ウイグル字モンゴル語とパスパ字モンゴル語の資料によりウイグル文字とパスパ文字との対応関係を確認しなければならない。残念ながら、パスパ字ウイグル語資料(チュルク語資料と言うべきかもしれない)として利用できるものは Zieme, P. (1998)⁴⁾ に収められた「TM191」と「TI」という僅かな断片と、松井太(1998)⁵⁾ に収められた印章くらいしか知らない。そこで、まずはウイグル字モンゴル語とパスパ字モンゴル語を資料とし、両文字の対応関係が字母表と一致するか否かを確認し矛盾点があればその都度検討するという方法をとることにする。資料は中村淳・松川節(1993)⁶⁾ 所収「蒙漢合璧少林寺聖旨碑」(以下、少林寺碑と略称する)のウイグル字モンゴル語およびパスパ字モンゴル語による。モンゴル語の日本語訳は中村淳・松川節(1993)による。必要に応じて照那斯図(1991)⁷⁾ を援用する。なお、ウイグル文字は()で、パスパ文字は「 」で括弧することにする。

①aleph(ʿ)と「ʿ(a)」「h(a)」「ḥ」「he」。先ず、aleph(ʿ)が二種の母音「ʿ(a)」と「ḥ」に対応することを確認する。少林寺碑では語頭のaleph二つ(ʿ)が母音の「ʿ(a)」と「ḥ」に、語頭のaleph一つ(ʿ)が「ḥ」に対応する。字母表ではaleph一つ(ʿ)に母音「ʿ(a)」「ḥ」が対応する。少林寺碑と字母表には相違があるけれども、alephに母音「ʿ(a)」「ḥ」が対応するという点についてはウイグル語でもモンゴル語でも同様である。次に、(ʿ)が音節中の占める位置の違いにより、二種の異なる母音「ḥ」と「e」に対応することを確認する。少林寺碑の(ʿRKʿKWTエルケウンたち)と「ḥr-kʿe·udエルケウンたち」によると、語頭の位置で(ʿ)は「ḥ」に対応し、語中で(ʿ)は「e」に対応する。このような、語頭で「ḥ」、語中で「e」という書き分けは他のパスパ字モンゴル語文にも共通して見られる現象である。本字母表でも(ʿ)は、音節初頭で「ḥ」に、音節中で「he」にみられる「e」に対応し、パスパ字モンゴル語文と平行した関係にある。最後に、(ʿ)が喉の摩擦音「h」(Poppe1957;glottal spirant)に対応することを確認する。少林寺碑の(ʿRʿNʿ～人に)と「h(a)-r(a)-n(a)～人に」、(ʿCWS最後の)と「he-ḥʿus最後の」によると、aleph(ʿ)(ʿ)と「h-」が対応する。このような対応は中期モンゴル語の語頭にみられる特徴であり、ふつうウイグル語にはみられない。字母表でも(ʿ)と「h(a)」「he」が対応する。

②beth(β)と「f(a)」「-v」。少林寺碑をみると、beth(β)と「f(a)」との対応は漢語語彙の表記に見られる。すなわち(KʿYPYNKβW開平府)と「γo-n(a)m-fu河南府」。次に、beth(β)と「並代句中 -v」の「-v」との対応について確認する。ここの「並代句中 -v」は、(β)が語中で「v(a)」に対応すると言っているのではなく、次に挙げる例から分かるように、(β)は語中もしくは語末の音節末の位置で「-v」に対応することを述べた箇所であろう。少林寺碑に(PʿβSW寶積)と「b(a)v--iḡ-zhi寶應寺」があり、音節末の(β)と「-v」の対応を確認することができる。

③heth(X)および二点付きheth+: (X)と、「q(a)」「·(a)」。第一字目のheth(X)は語頭形。第二字目の左二点付きheth+: (X)は、ふつうγで転写される母音間の文字。先ず、語頭形のheth(X)とパスパ文字との対応を確認する。少林寺碑の(XʿXʿN皇帝)と「q·(a)n皇帝」によると、語頭(X)は語頭「q」に対応する。次に、母音間の左二点付きheth+: (X)であるが、少林寺碑には以下一例しかでてこない。(NWYʿT-LWXʿノヤンたちと)。これに対応するパスパ字モンゴル語は少林寺碑にはなく、「薛禅皇帝龍年聖旨」(照那斯図1991)に「no-y(a)d-lu·(a)」とみえ、二点付きheth+: (X)と「·(a)」の対応を確認することができる。注意すべきは、少林寺碑では、(XʿXʿN皇帝)と「q·(a)n皇帝」が対応するように、母音間のγに相当する文字は二点付きheth+: (X)ではなく、点のないheth(X)である。点のない(X)が母音間にあって、「·」と対応することの方がふつうなのである。なお(X)と「q」(Poppe1957;deep velar stop)は男性母音と結び付き、女性母音の「e」などと結びつくことはない。これらは字母表の対応と一致する。

④waw(W) (-W)と「u」「o」「-v」。第一字目のwaw(W)は語頭形。二字目の(-W)は語末形。以下便宜上、語頭・語中・語末形を(W)で代表させることにする。少林寺碑の例は省略するけれども、(W)には「u」「o」の区別がなく二音に相当し、字母表にもそのことが反映されている。問題は(W)と「-v」の対応であろう。少林寺碑中の漢語の(SʿWLYM少林)(CʿNKLʿW長老)と「ḥev-lim少林」「ḡ(a)ḡ-l(a)v長老」によると、音節末の(W)は音節末の

「-v」と対応する。(W)と「-v」の対応はパスパ字モンゴル語文中の漢語語彙の表記に言及したものであろう。

⑤sin(S)と「s(a)」「se」。語中・語末のaleph(ʿ)は「(a)」「e」の両者に対応する。ウイグル文字は表記上この二種の母音を区別しない。そのため、字母表は「s(a)」と「se」を対応させたと考えておきたい。

⑥yod(Y)と「y(a)」「j̄(a)」「ye」「j̄e」。少林寺碑の(NWY'T官人たち)と「no-yad」によると、(Y)と「y」(Poppe1957;palatal voiced spirant)が対応する。(YRLX聖旨)と「j̄(a)r-liq聖旨」によると、(Y)と「j̄」(Poppe1957;lenis voiced affricate)が対応する。このように、モンゴル語では(Y)に「y」と「j̄」が対応する。一方のウイグル語はどうかというと、これは時代は降るけれども『高昌館訳語』をみると、語頭・語中・語末のいずれであってもyod(Y)と有声の破擦音すなわち「j̄」に相当する音は対応しない。恐らく字母表のyod(Y)と「j̄」との対応はモンゴル語用であらう。なお「(a)」と「e」の二種の母音が対応することについては⑤を参照。

⑦kaph(K)と「g(a)」「k'(a)」「ge」「k'e」。少林寺碑の(ʿWYKDWK'Y与えよ)と「ʿeog-t'u-geē与えよ」によると、(K)と「g」が対応し、(KWYCWNDWR力に)と「k'u-č'un-dur力に」によると、(K)と「k'」が対応する。なお、(K)と「g」「k'」は原則として女性母音を含む語に使用され、この点、⑦kaph(K)「g」「k'」と③heth(X)「q」とは母音について補い合っている。もっとも、文字表記の上では例外的に(MWNKK'とこしえの)に対する「mong-k'(a)とこしえの」のように男性母音(a)と結びつく「k'」がでてくる場合もある。円唇母音に関わるものとしては先に挙げた「k'u-č'un-dur」などがある。それでは、字母表のkaph(K)と「g(a)」「k'(a)」との対応はそのような幾つかの例外を示したのかというと、私はそうではないと考える。パスパ字モンゴル語文中の漢語語彙では「g(a)v-j̄in-žin高真人」(薛禅皇帝龍年聖旨(照那斯図1991))「k'(a)y-hj̄(a)-zhi開華寺」(普顔篤皇帝虎年聖旨1(照那斯図1991))のように、「g」「k'」は男性母音「(a)」と結びつく。恐らく、字母表の(K)と「g(a)」「k'(a)」との対応はパスパ字モンゴル語文中の漢語語彙の表記法に言及したものであろう。

⑧taw(T)と「d(a)」「t'(a)」「de」「t'e」。例文省略。(T)で有声子音と無声子音の両者を表記するため、パスパ文字では「d」と「t'」が対応する。「(a)」「e」は⑤を参照。

⑨mem(M)と「m(a)」「me」。例文省略。一対一の対応。「(a)」「e」は⑤を参照。

⑩nun(N)と「n(a)」「ne」。例文省略。一対一の対応。「(a)」「e」は⑤を参照。

⑪pe(P)と「b(a)」「be」。例文省略。一対一の対応。「(a)」「e」は⑤を参照。この項には次のような説明文が添えられている。「若句下更代一「・(a)」「・e」。この「若句下更代一」の「一」の部分は意味を取りにくい。何らかの欠落を想定しなければならないけれども、その主旨は「句の下で「・(a)」「・e」となる」ということであらう。またこの一文は衍文の可能性もあるけれども、このままでも解釈は可能であるため原文に従うことにする。さて、少林寺碑には一例だけ(ʿWYYL'TP'SWすれば)「ʿeuē-le-du·e-suすれば」というpe(P)と「・」の対応例がある。これは(P)が語中において母音に先立つばあい「・」と対応することがあるという例といえよう。この点につき、照那斯図(1989)⁸⁾によると、パスパ文字「・」と蒙古文語(m, b, y, w(u))などは少数ながら対応する場合があるという。やや苦しい解釈ではあるけれども、字母表の「句の下で「・(a)」「・e」となる」との注記

をこのようなものと考えておく。

⑫sadhe(C)と「č'(a)」「č'e」。例文省略。一対一の対応。「(a)」「e」は⑤を参照。

⑬sin+(S)と「š(a)」「še」。右二点付きのsin+(S)と「š」との対応は一部の語彙に限られる。少林寺碑では(S' WLYM少林)「šew-lim少林」という漢語語彙が二例あるのみで、それ以外の大多数の語では点のない⑤sin(S)が「š」に対応する。字母表の⑤sin(S)と「s」、⑬sin+(S)と「š」の対応は、字母表が少林寺碑よりも用字法の整理が進んだ段階をしめしているように思える。「(a)」「e」については⑤を参照。

⑭resh(R)と「r(a)」「re」。例文省略。一対一の対応。「(a)」「e」は⑤を参照。

⑮hooked resh(L)と「l(a)」「le」。例文省略。一対一の対応。「(a)」「e」は⑤を参照。

四

以上により、字母表中のパスパ文字はモンゴル語音(漢語語彙の音を含む)を示すと結論して矛盾はない。特に①にみえるaleph(')と「h」との対応、⑥にみえるyod(Y)と「y」「j」との対応はモンゴル語音の特徴があらわれたものとみてよい。ただしウイグル語であることを積極的にしめす点も、ウイグル語でないことを証明する点も見いだすことはできなかった。したがって、厳密にはウイグル語音も同時に表記しているという考えを排除するわけにはいかない。

さて、上で行った作業は、ウイグル字モンゴル語文とパスパ字モンゴル語文の文字の対応が、字母表のウイグル文字とパスパ文字の対応と一致するということの確認であった。これは、大きな問題を含んでいる。なぜならば、字母表のウイグル文字とパスパ文字の対応が示すものとして以下二つの可能性を認めなければならないからである。

- ア. パスパ文字は、漢字音注の代用として、ウイグル文字で記されたモンゴル語の音を示す。
- イ. 互いに独立したウイグル字モンゴル語文とパスパ字モンゴル語文の、文字と文字との対応を示す。

もしも、アであるならば、字母表をモンゴル語音韻史の資料として利用することができる。例えば、母音間のheth(X)の音を「・」で示したものとすれば、これは互いの音を検討する資料となる。そうであるならば、管見によるかぎり、本字母表はウイグル文字に直接パスパ文字で音注をほどこした唯一の資料ということになる。一方、イであるならば、本表の用途を考えねばならない。ウイグル字モンゴル語文と国字であるパスパ字モンゴル語文を互いに書き換えるさいの注意書きのようなものと理解することも可能となる。

アとイのいずれであるか、説得力のある根拠を見いだすことはできなかったけれども、私はイではないかと想像している。それというのも、④においてwaw(W) (-W)をモンゴル語の「u」「o」と対応させるだけでなく漢語音節末音の「-v」とも対応させている。また、⑦においてkaph(K)をモンゴル語の「ge」「k'e」と対応させるだけでなく漢語表記用と考えられる「g(a)」「k'(a)」とも対応させている。さらに、字母表の後ろの説明には「此為一十五音也。外拋k, t, p', z, ○j, c', c, č 等母。其畏吾 [兒] 中。雖無此字。今就斜声頗同者代而已。」とある。「k, t, p', z, j, c', c, č」は漢語表記専用のパスパ文字である。後半の「斜声頗同者」の解釈は難しいけれども「音の近いもの」という主旨の表現であろう。そうするとこの一文は、パスパ字漢語音の「k, t, p', z, j, c', c, č」などウイグル文

字にない音を表わす場合、音声の近いウイグル文字で代用する、という意味になる。ウイグル文字の音を示すだけであるならば、漢語音の表記法に言及するのは余計なことである。おそらく、漢語語彙を含む実際のウイグル字モンゴル語文とパスパ字モンゴル語文を比較対照し文字の上における対応を表にしたものであろう。

なお、『書史会要』巻之八外域篇には天竺、畏吾兒、回回、日本の文字に関する記載があり、畏吾兒を除いた天竺、回回、日本は文字の音を漢字による注で示している。畏吾兒だけは異なった体裁で、ウイグル文字を示し対応するパスパ文字を下に付す。この体裁の違いは、ウイグル字母表が陶宗儀の創作ではなく伝世の資料を流用したものであることを暗示する。本表に誤字衍文がことのほか多いのはこのことと関連があるとみたい。

以上を総合し、元末まで伝わったウイグル字モンゴル語文とパスパ字モンゴル語文の文字の対応表を陶宗儀が流用し『書史会要』に収めたものが本字母表であると想像する。

注

- 1) 森安孝夫(1995)「古代ウイグル文書の世界」(『東洋学報』第77巻1・2号,1995年,pp.169-173.これは1995年6月6日に行われた東洋文庫主催「平成七年度春期東洋学講座アルタイ諸語の世界」の講演要旨)。これによると「陶宗儀は『書史会要』巻八でイスラム教徒が使用するアラビア字を「回回」文字とし、モンゴルが採用したウイグル文字を「畏吾兒」文字と正しく認識しており、・・・」(p.172)とある。森安孝夫(1997)「ウイグル文字新考－回回名称問題解決への一礎石－」(『東方学会創立五十周年記念 東方学論集』東京：東方学会,1997,pp.1238-1226)。
- 2) 本字母表中のパスパ文字がモンゴル語音を示すということについては、初めに対音対訳資料研究会(1995.3.20/21。富山大学)において、最近では中国語東アジア諸語研究会(2003.7.18。青山学院大学)で報告した。
- 3) Poppe,N.(1957),*The Mongolian Monuments in Hp'ags-pa Script*,Second Edition translated and edited by J.R.Krueger,Wiesbaden,1957.
- 4) Zieme,P.(1998)Turkic Fragments in 'Phags-pa Script.『内陸アジア言語の研究』XIII;pp.63-69.
- 5) 松井 太(1998)「ウイグル文クトルグ印文書」『内陸アジア言語の研究』XII;pp.1-62.
- 6) 中村淳・松川節(1993)「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』VIII;pp.1-92.
- 7) 照那斯図(1991)『八思巴字和蒙古語文献Ⅱ文献彙集』AA研。
- 8) 照那斯図(1989)「八思巴字中的零声母符号」『民族語文』1989年第9期;pp.29-36.